

第 2 学年 道徳学習指導案

- 1 主題名 社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。
- 2 内容項目 社会参画・公共の精神【C・(12)】(関連項目 公正・公平【C・(11)】)
- 3 資料名 「加山さんの願い」 作者 藤永 芳純
(出典「改訂新版 中学生の道徳 P110～P113」)

4 ねらい(視点)

人は自分でも気づかないうちに、自然に人を差別していることがある。自分の方が優位な立場にあると思った時点で「してあげる」「してあげているのだから、相手は喜ぶべきだ」といった「上から」の意識も芽生える。また、障がいをもつ者とかかわる中で「行き過ぎた気配り」という形の差別意識を感じたり、善意とするボランティアにおいて、役に立っているつもりでも、実は相手のことをよく考えずに行ったことが逆に迷惑だったりする例もある。

人のためや世の中のために何かを為すときに、「してあげる(上から)」「しなければならない(義務)」「過剰な配慮(逆の意味での差別)」などの考え方は、働く側のモチベーションを保つためには大事なこともなのかもしれない。けれども大本にある「すべての人間は対等である」という意識、そしてその「対等である」ために共通して言えることは「相手の立場に立って考えた『つもり』」ではなく「『真に』相手の身になって考える」ことが大切であるということ、本時の題材であるボランティアへの取組を通して考えさせたい。

5 本時の展開

時	主な学習内容・活動	評価・留意点
導入 5分	<p>「奉仕」について意識させる。</p> <p>○相手が喜ぶと思ってしたことが、思ったほど喜ばれなかったり、逆に相手を不快にさせてしまった経験はないか。</p> <p>＊電車で席を譲ったけど、怒られた。</p> <p>＊プレゼントをあげたけれど、喜んでもらえなかった。</p>	<p>本時の学習課題を意識させる。</p> <p>意見が出なければ例を示す。</p>
展開 38分	<p>資料を教師が読む。</p> <p>加山さんの人物像や、話の流れを押さえる。</p> <p>○「加山さんてどんな人だろう?」「中井さんは?」</p> <p>加山さん ＊「いい人」「我慢強い人」</p> <p>中井さん ＊「頑固な人」「怒りっぽい人」</p> <p>○問い返し「どうしてそう思う?」「どんなところが?」「怒りっぽいということは、悪い人なのかな?」</p> <p>加山さんに心を開いた中井さんの気持ちを考える。</p> <p>○中井さんが加山さんに心を開くようになったのはなぜだろう。</p> <p>＊「身の上話をしたから」「加山さんが心を開いたから」「中井さんの気持ちに寄り添ってくれたから」</p> <p>○問い返し「何がきっかけ?」「どうして心を開いていなかったの?」「中井さんはどう接してほしかったの?」</p> <p>資料プリント「見えない差別」配布</p> <p>中心発問 ○加山さんの「願い」とはなんだろう。</p> <p>「願いカード」を配り、資料プリント等も参考にしながら記入する。</p> <p>発表させ、同じ考えを持つ人はカードをホワイトボードに貼っていく。</p> <p>＊「ボランティアを上から目線でしない」「孤独死をなくす」「自然体で接する」「差別をしない」</p> <p>○問い返し「ボランティアのことだけ願い?」「お年寄りに対することだけなのかな?」「自然体で上からになることってないの?」「加山さんは相手のことを考えていないのかな?」</p>	<p>発問を通して人物像やストーリーを押さえ、内容の理解を深めていく。</p> <p>2人とも決して特別な考え方もつ人ではないことに気付かせる。</p> <p>「自分から心を開くこと」「対等な立場で自然に接すること」が大切であることに気付かせたい。</p>
終末 7分	<p>ワークシートを配布し、感想を書かせる。</p>	<p>ホワイトボードに貼られたカードを使って、問い返しをする。</p> <p>様々な問題の根本に「気付かずに持ってしまう差別意識」があることに気付かせたい。</p> <p>2～3人指名して、発表させる。</p>

資料

震災被災地への救援物資について

ツイッター上で「千羽鶴・寄せ書き・古着・生鮮食品」などは「送らない方がいい」という呼びかけがある。そもそも、個人が被災地に救援物資を送ること自体が、被災地にとっては「ありがた迷惑」となる可能性がある、という声もでている。個別包装の救援物資の梱包を解いたり仕分けしたり、運ぶトラックや荷卸しを待つトラックで大渋滞が起きたりなどの問題も出ている。

「お願いだから、むやみやたらに救援物資を送らないで」

「一時的な感情で小口の物資を送っても、被災地の負担とゴミを増やすだけ」

「個人の支援物資は、被災地の自治体職員に一層の負担を強いる」

※乙武洋匡さんのツイッターから

阪神大震災で被災した当事者の一言。「助けに来てくれて一番ありがたいと思ったのは、自衛隊の人たち。一番迷惑だったのは、自称ボランティアの人たち。こちらが必要とすることはできず、逆に残り少ない食品や飲料水をコンビニで消費していく始末」

誤解を招く言い方だったらごめんなさい。ボランティア自体を否定するものではありません。準備と覚悟を持たずして現地入りすることが、かえって被災地の方々にとって負担となってしまうことをお伝えしたかったのです。気分を害された方がいたら、お詫びします。

知らず知らずに行っている外国人への差別

過剰な親切も、ある意味では差別行為と言える。例えば、欧米人ははしの使い方を知らないだろうという「偏見」から、欧米人が日本人と一緒にレストランに行っても、一人だけのはしの代わりにフォークとスプーンを用意されることがあるが、これは恥ずかしく、不快で、時には屈辱的な行為だ。

テレビなどで外国人の旅行者などを扱う番組でも、スタッフはあえて最も風変わりで、わけがわからない人を選んでるように見える。これは「外国人像」の偏見を増長させ、知らず知らずのうちに差別と偏見を煽っている。

気配りの裏返しの障がい者への差別

当事者でないと気づかないようなことで、知らず知らずのうちに差別をして相手を傷つけてしまっている場合があります。逆の立場だったら、どんな気持ちになるでしょうか。

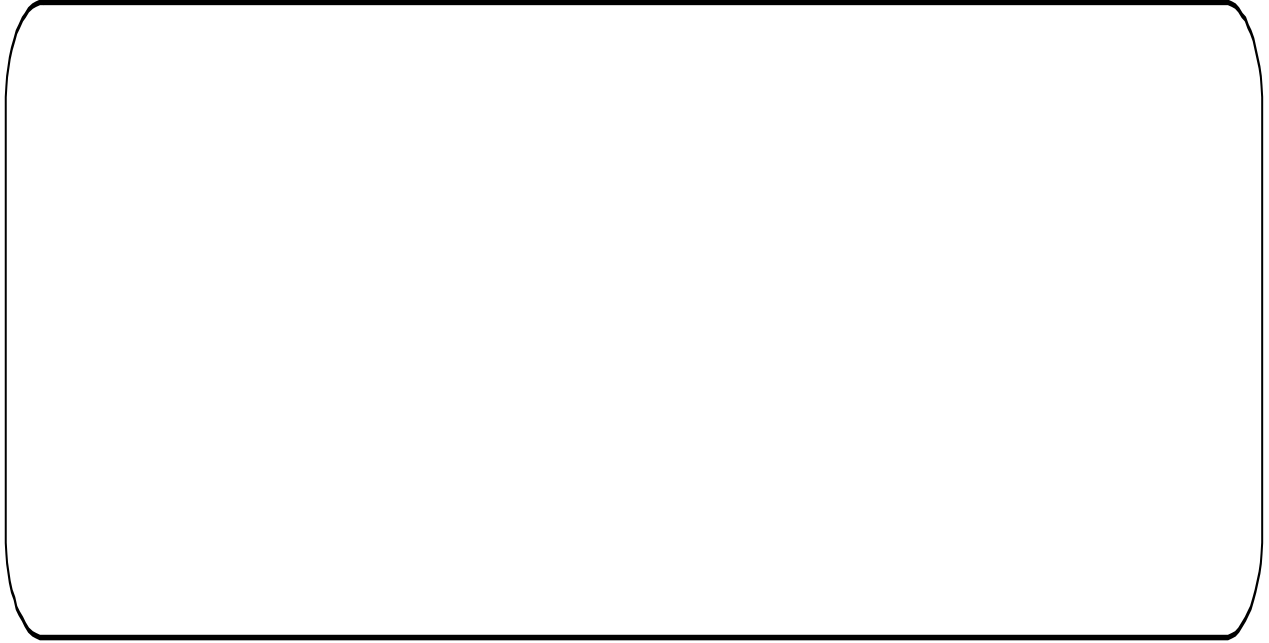
心ない言葉やジロジロ憐みの視線、障がい者は擁護されるべき気の毒な存在ととらえる感覚は、差別以外のなものでもありません。「大変ね」「かわいそうに」などと、同情する言葉も必要ありません。このような言葉かけをすると、上から見下したようかえって失礼にあたります。

街中の段差が減ったり、自動販売機の入金位置が低くなったりなど、どれだけハード面が整備されてきても、人の心、「思いやりや気遣い、やさしさ」といった部分が抜け落ちていては、成熟した社会とは言えません。心のバリアをなくす一番の近道は、他人事ではなく我が事として、相手の立場に自分を置き換えて感じることです。

25 加山さんの願い

組 番
名 前

●今日の授業を受けて、思ったことや考えたことを書いてみよう。



加山さんの願い



2年 ___ 組 ___ 番 氏名 _____